(2)古代～中世(縄文時代～安土・桃山時代)

阿賀川舟運は津川までが古くから利用されていた。米沢との街道は、檜原峠越えが主流であった。

檜原峠と入田付峠

米沢へ街道は檜原峠越えが一般的であり、このルートで米沢方面に仏教が伝播したものと考えられる。米沢の伊達氏と会津の芦名氏は、檜原峠を越えて攻防が繰り返されており、大峠(入田付峠)は、伊達政宗が会津侵攻の道として密かにひらいたとされる。当時記された「会津風土記」には、「路狭くて牛馬通せず難」とある。

阿賀川舟運

会津地方を貫流する大河川阿賀川の舟運は津川(今の新潟県)までが古くから利用されたが、その上流には難所が多く、蒲生氏に始まり歴代の領主が繰り返し改修を試みたものの、利田(かがた)滝や銚子ノ口などの難所は陸送に依らねばならなかった。それでも塩川までの舟運が盛んに利用され、塩川には会津藩の米蔵、塩蔵が置かれていた。

(資料:新版会津の峠)